編集委員長就任にあたって

編集委員会 委員長
慶應義塾大学医学部 内科　日比 紀文

癌は日本人の死亡原因第１位を占め、罹患率は年々増加しています。その原因として、平均寿命の延長にともなう人口の高齢化、感染性疾患などによる死亡率の低下、生活習慣の変化、診断制度の向上などが考えられます。国民の３人に１人が癌で亡くなるという現在、癌は生活習慣病・成人病として認識されるべき疾患であり、その診断、治療技術の進歩は、医学者のみならず全国民が関心を寄せるところであります。

本会の設立目的を紐解いて見ますと、「癌の病態（素因や環境因子など）に基づく、個人個人に適した治療法の確立、すなわち、種々の臓器の癌患者のもつ悪性度にあった治療や、宿主の生体反応に合った治療法の確立を目指し、患者の Quality of Life（QOL）などの向上を図る事を目的とする」とあります。根治を目指して治療に盲進していた時代と異なり、複雑多様化する価値観が存在する現代において、癌治療に従事するものが尊重すべき根本理念が含まれているものと考えます。このような設立目標を掲げ、1992年に発足した本会も今年で15年目を迎え、学術誌「Annals of Cancer Research and Therapy」にも優れた論文が複数掲載されてまいりました。

本年度より編集委員長を務めさせていただく運びとなり、今後より一層の本研究会ならびに学術誌の発展に向け、努力してゆきたいと存じます。会員の皆様のご協力を、お願い申し上げます。

近年のわが国の癌研究の進歩は目覚しく、発癌の分子機構や、癌の病態と遺伝子変化との相関も解明されてきています。基礎研究の成果を応用して、分子・遺伝子のレベルでの癌診断や分子標的治療など、新規診断臨床に治療技術の開発や研究が進展しています。また、疫学的には過去数十年における日本人の生活習慣の変動による癌罹患率の変化が明らかとなり、発癌における環境因子の重要性が示されてきています。これらの研究は世界的にも大きなインパクトを与え、わが国発の clinical oncology 理論を世界へ向けて発信しつつあると言えるでしょう。本研究会のこれからの活動成果が、今後もわが国の癌研究の発展に貢献することが出来れば幸甚であります。